『禅宗六祖慧能大師頂相東來縁起』の問題点

鄭 榮 植

序論

『景德伝灯録』巻五、「慧能大師条」には、慧能が示寂する時、弟子との問答の中、次のような記録がある。

又問、師之法眼何人傳受。師曰、有道者得、無心者通。又問、後莫有難否。曰、吾滅後五六年、當有一人來取吾首。聽吾記。曰、頭上養親、口裏須餐。遇滿之難、楊柳為官。開元十年壬戌八月三日、夜半忽聞塔中如拽鐵索聲。僧衆驚起、見一孝子從塔中走出。尋見師頸有傷。具以賊事聞於州縣、縣令楊侃刺史柳無忝得牒、切加擒捉。五日於石角村、捕得賊人、送韶州鞠問。云、姓張名淨滿、汝州梁縣人。於洪州開元寺、受新羅僧金大悲錢二十千、令取六祖大師首。歸海東供養。

この記録は慧能が五祖弘忍から伝法の印である袈裟を渡された後、慧能を害し袈裟を盗もうとする難に何度も遇う、と言う説話に基づくもので、元々は『菩提達磨南宗定是非論』（七三二年纂）の荷沢神会の話に由来するものである。この六祖

慧能首切取事件（以下、切取事件と略称）に新羅僧金大悲が登場することによって、従来韓国人の関心を引いてきた。

ところで、韓国には『海東高僧伝』の著者覺訓（生没年代不詳、十三世紀初）の纂となる『禅宗六祖慧能大師頂相東來縁起』（以下、『東來縁起』と略称）と言う短編が存在する。この文献は切取事件を韓国の立場から叙述したもので、高麗と朝鮮時代には全く知られた跡が無く、近代になって初めて現れたのである。本論文は『東來縁起』の問題点と作者に関して考察を行う。

本論

一、『東來縁起』の内容と問題点

『東來縁起』の内容を簡単に要約すると、次のようである。
（新羅の聖徳王在位（七〇二〜七三七年）の時、三法和尚が嘗てから慧能を慕い、参問しようとしたがかなわなかった。ある日、

『禪宗六祖慧能大師頂相東來緣起』の問題点(鄭)

慧能の示寂を知り嘆いたが、ちよどその時、弥勒寺僧圭晶が唐から持ち帰った『法宝壇經鈔本』を読むと、慧能が「私が入寂してから三十年後、ある人が私の首を取りに来るだろう」と言う顛記があった。それで、彼は「慧能の首を持ってきて、海東の福田になるう。」と決心し、金庾信の婦人法淨比丘尼から二万金をもらい唐へ渡り、韶州の宝林寺に着いた。しかし、警備が厳しいので盗むことが出来なかつた。その途中、洪州開元寺に本国の栢栗寺僧大悲禅伯が泊まっていることを知り、共謀した。当時、張淨滿が開元寺にいたが、両親が亡くなり喪心していた。それで、金大悲と三法和尚は張淨滿に二万金を渡して両親の葬式を手伝った後、慧能の頂相を盗ませた。張淨滿はすぐ慧能の頂相を盗み三法和尚に渡し、三法はそれを持って海東へ帰った。三法は慧能の予言に随い双溪寺に頂相を奉安して庵を建てた。しかし、その後、三法は示寂し、庵も火事で焼かれてしまった。後代、真鑑国師慧昭(七七四〜八五〇)が三法和尚の遺基にお寺を建て、六祖真殿を建立した。

三法和尚の旧稿に基づいて、簡略にこの文章を整理する。

高麗国、五冠山、大華嚴靈通寺、伝仏心印、一国都大禅師、釈覺訓謹書。時、大宋崇寧二年癸未二月日也。

『東來緣起』の創作に於いて、まず素材となつたのは崔致遠の「双溪寺真鑑禅師大空塔碑」(八八七年作)である。

因於花開谷故三法和尚蘭若遺基、纂修堂宇。……始用玉泉為勝。屈指法胤、則禪師乃曹溪之玄孫。是用建六祖影堂。

『東來緣起』の作者は、「三法和尚の遺基に慧昭が六祖の影堂を建てた。」と言う記録に基づいて、「三法和尚が慧能の頂相を持ち帰った」と操作し、更に『景德伝灯録』には登場しない三法和尚を主人公としている。それは、双溪寺と六祖頂相をつなげるために操作したことであり、現在も双溪寺には六祖頂相塔が現存し、毎年慧能を祭る祭祀が行われている。このように、『東來緣起』は「双溪寺真鑑禅師大空塔碑」を基本素材とし、更に『三国遺事』などから素材を得ている。それを見ると、

①『双溪寺略史』では三法和尚を義湘(六二五〜七〇二)の弟子としているが、義湘の弟子に三法という僧はなく、詳伝は分からない。しかし、『三国遺事』巻四「義解第五」の「義湘傳教条」には、義湘が建てた華嚴十刹の中に玉泉寺(双溪寺)が挙げられているため、無理矢理三法和尚を義湘の弟子だと言つただろう。⁽⁴⁾

②栢栗寺僧大悲禅伯については、『三国遺事』巻三「三所觀音」「栢栗寺条」に「寺有大悲之像一軀」となっている。⁽⁵⁾大悲像とは、大悲菩薩則ち、觀音菩薩の像に他ならない。『東來緣起』の作者はここから、栢栗寺僧金大悲を作り上げたのである。『東來緣起』の作者が本当に大悲像を「金大悲の像」と考えたなら、それは『東來緣起』が近代に作られたことを裏付けることになる。なぜなら、仏でも菩薩でもない一般僧

の像を造る習慣は近代以前にはなかったからである。

③最も大きな問題は、『東来縁起』が首と頂相を同一視していることである。中国のすべての資料には、「張淨滿が慧能の首を取ろうとした」となっている反面、『東来縁起』や『双溪寺略史』などの韓国の資料は「慧能の頂相を持ち帰った」となっている。慧能の首とは、慧能の死後、遺体をミイラ化したものであり、頂相（上半身の絵）とは違うものである。それは『景德伝灯録』に「門人憶念取首之記、遂先以鐵葉漆布、固護師頸。」と記録されているところからも分かる。実際に、現在中国広東省韶州の南華寺（則ち、曹溪宝林寺）の六祖殿には六祖の肉身が漆布で包まれ、乾漆像となつて保存されているという。⁷⁾

二、著者について

まず、『海東高僧伝』の著者、覚訓を「大禪師」と表現したのはおかしい。彼が住持した「大華嚴靈通寺」からも分かるように、覚訓は華嚴僧だからである。また、『東来縁起』ではその著作年を「大宋崇寧二年癸未」としているが、大宋崇寧二年は一一〇三年で、覚訓の生存年代（十二世紀中盤〜十三世紀初盤）と合わない。『東来縁起』が近世に至るまで全く知られていなかったことと、著者覚訓説の問題点を考えると、『東来縁起』は近世の人物の作であり、それを覚訓に仮託し

たものであろう。

①『朝鮮仏教通史』（一九一八）の著者、李能和説

その根拠には、次のようなものがある。

(A) 『東来縁起』の素材がすべて『朝鮮仏教通史』に具えられている。『朝鮮仏教通史』「新羅聖徳王条」(p.92, 93) には、『東来縁起』の登場人物の中、金庾信の妻智炤夫人・智炤夫人が居した靈妙寺・唐から『法宝壇経鈔本』を持ち帰った圭晶の出身である金馬郡弥勒寺が登場する。更に、p.90「孝昭王」条には、金大悲の出身である柏栗寺に大悲像があつたことを記録している。

(B) 李能和は六祖頂相東来説を歴史的な事実として決めようとする意図を持っていた。たとえば、彼は「六祖は東人（韓国人）が首を取りに来ることを予言した」と言うが、六祖の顕記には元々「東人」という言葉はない。更に、元々三法和尚と六祖頂相とは関係がないが、李能和は「慧昭が六祖影堂を建てたのは三法和尚が持ち帰った六祖頂相を奉安するためである」と主張している。⁸⁾

②『山史略抄』の著者、雪寶有炯（二八二四〜一八八九）説

韓国の『枢要明記』（著者未詳）には、『禪宗第六祖慧能大師頭像東来縁起』が所収されている。『頭像東来縁起』は「頂相東来縁起」の「頂相」を「頭像」へ替えただけで、他は全く同じである。所で、同じく『枢要明記』に収録されている

『禪宗六祖慧能大師頂相東來緣起』の問題点(鄭)

『山史略抄』には切取事件が書かれており、故に『頭像東來緣起』の作者も雪竇有炯である可能性がある。

結論

切取事件は歴史的事実ではない。故に、当然『東來緣起』は創作である。『東來緣起』の作者については、李能和説と雪竇有炯説を立てたが、確証はない。只、①『東來緣起』に關する全ての資料が一九一五年前後に出ていること。②『東來緣起』の作者は智理山七仏寺と關連がある人物であると思われる。それは、現存する『東來緣起』の二寫本、則ち『頂相東來緣起』には「七仏庵抄出」と書かれており、『頭像東來緣起』のすぐ後には『東国第一禪院(七仏庵)古今事蹟緣起略抄』が着いているからである。

1 大正51, 236b ~ c

2 本論文は『禪宗六祖慧能大師頂相東來緣起』考(鄭性本『新羅禪宗の研究』、民族社、一九九五)の研究に基づいて、残された問題点を指摘したものである。

3 『朝鮮金石總覽』上、p.93

4 湘乃令十刹傳教、太伯山浮石寺・原州毘摩羅・伽耶之海印・

毘瑟之玉泉・金井之梵魚・南嶽華嚴寺等是也。(大正49,

1007a)

5 鷄林之北岳曰金剛嶺、山之陽有柏栗寺。寺有大悲之像一軀、

不知作始、而靈異頗著。(大正49, 902c)

6 大正51, 236c

7 『慧能研究』p.210下

8 『朝鮮仏教通史』卷下、pp.139-140

9 ここで頂相と首との混乱が見える。

10 『六祖頂相塔放光論』(二九一四)、『禪宗六祖慧能大師頭像東來緣起』(二九一五筆写)、『双溪寺略史』(二九一八)、『朝鮮仏教通史』(二九一八)

(キーワード) 韓国、近代、禪宗、慧能、『禪宗六祖慧能大師頂相東來緣起』、双溪寺

(東京大学大学院)

ture of that work is its emphasis on living freely without attachment to the concept of enlightenment.

30. A “12 Division of Time” in Chan — Dunhuang document Pelliot chinois #3604

Szu-wei LU

This document is based on the division of time named “the twelve horary signs,” and elaborated in the twelve kinds of verses. The unknown author of this document states his thought and practices of Chan through these verses. This was formed under the influence of the Northern Chan School before the eighth century, characterized by Nembutsu (Buddha-Contemplation)-Chan syncretism.

31. The Problem of *An Account of the Coming East of Huineng’s Dingxiang*

Young-sik JEONG

In this article, I have examined a Korean text *An Account of the Coming East of Huineng’s Dingxiang* written by a Korean monk Kakhun (覺訓). It tells the story that a Silla monk Kim Deabi (金大悲) tried to cut the head off the corpse of Huineng, an episode mentioned in the *Jingde Chuandenglu* (1004). However, this document is based on two materials: the *Sanggaesa jingamsōnsa daegong tappi* 双溪寺真鑑禪師大空塔碑 and the *Samguk yusa* 三国遺事. Two problems are focused on here. First, a ‘Dingxiang’ portrait of a Chan master is equivalent to a ‘head’; second, the creation of the monk Kim Deabi 金大悲 just originated from a sentence that “there is a statue of Taebi 大悲 in Paengnyul (栢栗) Temple”.

32. The *Kettō Jushuin Gimonsō* (決答授手印疑問抄) of Ryōchu (良忠)

Kōjun HAYASHIDA

This paper is a study about the reason why Ryōchu (良忠) wrote the *Kettō*